

---

# バカとアイドルと後輩達との日常風景

ransu521

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとアイドルと後輩達との日常風景

### 【Nコード】

N8876Z

### 【作者名】

r a n s u 5 2 1

### 【あらすじ】

文月学園に、一人の女子生徒が転入してきた。その転入生は、有名なアイドル『MARNO』だった。学園内で話題となっているMARNOは、どうやらAクラスに転入したらしい。その日から、明久達の生活は相変わらずの騒がしさをとどめつつも、少しずつ変化を見せて行くのであった。アイドルとの出会い、後輩との出会い、様々な出会いが、明久達を待ち構えていた。

## プロローグ

「グスン……グスン」

「ねえ、どうして泣いているの？」

「……お母さんにもらった髪飾り、どこかに落としちゃって……」

「……それは、とっても大切な物なの？」

「うん。誕生日の日にもらった、大切な髪飾り……」

「そっ……なら、僕でよかったら、一緒に探そうか？」

「え？いいの？」

「もちろんだよ。このくらい、当然のことだよ」

「……ありがとう」

「君、名前は？」

「わ、私は……牧野亜美」

「亜美、か……可愛い名前だね」

「か、可愛いって言われたのは初めてかな……？ 君の名前は？」

「僕？ 僕の名前は……」

## プロローグ（後書き）

お久しぶりです、ransu521です。

今小説は、「バカとアイドルと日常風景」「バカとアイドルと後輩達」を再編集したものでございます。

後者に至っては未だに連載続いてますが……まあ、ね？（おい）。現在の自分で書いたらどうなるんだろう……？という興味本位から初めて見ました。

多分途中で挫折します（おいこら）。

今までのエピソードに加えて、新たなエピソードも盛り込む予定です。

どうか新しい形の「バカアイ」シリーズをよろしくお願い致します。

## 第一問 1 (前書き)

### 【第一問】 現代国語

以下の問いに答えなさい。

「前に学んだことや古いことを研究して、それによって現代のことを知ることを示す四字熟語を答えなさい」

姫路瑞希の答え

「温故知新」

教師のコメント

正解です。この問題は、姫路さんには簡単過ぎたでしょうか？

土屋康太の答え

「体重測定」

教師のコメント

女性にとってはとてもシビアな問題ですが、古いことは研究出来ても、今のことを知ることはできませんよ。

吉井明久の答え

「自由研究」

教師のコメント

それは夏休みの宿題です。

## 第一問 1

「Side????」

長かった。

ここまで来るのは本当に長かったよ。

君がこの学校に通ってるってことを知って、私はもう我慢出来なくなっちゃったの。

早く会いたい。

待っててね、今会いに行きます……吉井明久君。

\*

「Side 吉井明久」

ある日のことだった。

僕らの通う学校である文月学園では、今日は特に行事とかが行われるわけでもないのに、かなり揺れていた。

その原因は……僕にはさっぱりわからなかった。

「一体何の騒ぎなの？雄二」

「何だお前、知らないのか？」

僕の悪友でもある、坂本雄二にそう尋ねる。

すると、何言っただコイツ的な目で、僕は見られた。

……そんな目で僕を見るな！！

分からないのは仕方ないことじゃないか！

「Aクラスに転入生が来るそうぞ」

「Aクラスに転入生？ こんな時期に？」

珍しいこともあるものだなあ……あ、でも確か工藤さんも転入生だったっけ？

けど、時期的には結構微妙な時期に来る転入生だと思う。

だって、今は二学期が始まってすぐの時だし。

……というか、自分のクラスの転入生でもないのに、どうしてそこまで騒ぐのだろうか？

「何言つてんだよ明久。その転入生というのが、あの有名なアイドル、『MARNNO』だぞ？」

「……『MARNNO』？」

ええつと……『MARNNO』って言われても……聞いたことない名前だけど。

少なくとも、ここ十六年間生きてきて、一度も耳にした覚えのない言葉だった。

「知らないの？ 今有名な人気アイドルよ？」

ポニーテールを揺らし、驚いたような表情を見せながら、島田美波さんがこっちにやってきた。

どうやら美波も、『MARNNO』のことを知っているらしい。

「うん、聞いた覚えのない名前だね……」

「明久はいつもゲームしかやってないからな。知らなくて当然だな」

「失敬な！ マンガや小説だってちゃんと読んでるよ！」

雄二が憎い程の笑顔でそう言ってきた。

だから僕はそうやって反論したんだ。

まったく、僕がゲームしかやらない廃人みたいな扱いして！  
僕はそこまで堕ちてないってば！

「…………マンガとゲームという組み合わせは、廃人の一歩手前だぞ、  
明久」

「雄二、それは言わないで…………」

「しかも、お姉さんが帰ってきたおかげで、それもほとんど出来な  
いんじゃないかったか？」

何だか無性に悲しくなってきた。

僕、廃人じゃないのに…………。

それと、とある事情があつて、僕の家には姉さんが帰ってきていた  
りする。

…………もつとも、今はこの前持ってきて忘れた荷物を回収する為に、一  
旦日本から出てるけど。

僕の家族は今、アメリカにいる。

僕は文月学園に通う為に日本に残ってたんだけど、ある一件から姉  
さんが一緒に住むことになっちゃったんだ。

そう言えば妹もいるんだけど…………沙耶は元気にしてるのかなあ。  
と、そんなことを考えていたら。

「……………転入生、見てきた」

「うわっ！いきなり後ろから声かけないでよ！」

突如として僕の背後より話しかけてきたのは、Fクラスのクラスメ  
イトその3である、土屋康太、通称、ムツリーニ寡黙なる性識者。

右手には、ムツリーニ愛用のカメラが握られている。

もう片方の手には、写真も握られていた。

さすがはムツリーニ…………何て行動力の速さだ。

その速さしかもはや尊敬に値するよ。

「どんな子だったの？」

「……………白」

ムツツリーニは、一体転入生のどの部分を見てきたのだろうか？

「……………一枚三百円」

「買った！」

「買ったな！！！」

「いだだだだだだだ！！！」

買おうとした所で、美波に右腕をへし折られそうになった。

い、痛いから！

腕はそんな方向に曲がらないから！！

だから早く僕の右腕を離して！！

「お主らは相変わらず騒がしいのう」

「ひ、秀吉？」

僕達の様子を見てそう言うてきたのは、Fクラスにおける美少女その2である、木下秀吉。

最も、生物学的分類はおt……………いや、秀吉は『秀吉』なんだ！性別とかそんなのは関係ない！

「……………明久、さっきからじっと見てきて、何かついておるのか？」

「いや、そんなわけじゃないけど」

いけないいけない。

妄想……………もとい考え事に没頭してしまう所だった。

とりあえず、話題を変えよう。

「それじゃあ、みんなでその転入生を見にAクラスに行ってみようよ」

「頼むから、それだけはやめてくれ」

「え？ 何でさ？ 雄二も興味あるんじゃないの？」

全力で拒否してくる雄二に僕は尋ねる。

だってアイドルなんでしょ？

雄二も男なら気になるところじゃないのかな？

「確かに気にはなる。気にはなるがな…… Aクラスだぞ？」

「うん、そうだね」

「そうね。Aクラスね」

「……お前ら、実はもう分かってるだろ」

Aクラスといえば、雄二のことが好きな霧島翔子さんがいるクラスだ。

……映画館の時のトラウマでも蘇っているのだろうか？

いや、多分雄二のトラウマはそれだけじゃ留まらないんだろうけど。

「まあ、とにかくみんなで行ってみようよ！ ほら、姫路さんも一緒に」

「わ、私もですか？」

僕の隣の席に座る姫路瑞希さんにそう尋ねる。

姫路さんは、若干考える素振りを見せた後に、

「はい。私も少しだけ興味があります」

「そっか。よしっ、早速今から見に……」

と、そんな流れで僕達が教室を出ようと思ったその時だった。

「お前ら！ さっさと席に着け！！」

「げっ、鉄……西村先生！」

「吉井。今お前、鉄人って言おうとしただろ？」

「いえいえ、滅相もございません！」

危ない危ない……危うく鉄人と言ってしまっ所だった。

たった今僕達の教室に入って来たのは、西村先生、通称、鉄人。

とある一件から、元々担任だった福原先生に代わって、僕達の担任になることとなった。

……以降、鬼の補習の様な毎日が続く羽目に。

「それじゃあ、授業を始めるぞ」

こうして、とりあえず転入生を見に行くのは次の休み時間まで流れることとなった。

\*

授業も四時間目まで終わり、今は昼休みだ。

行くとしたら、このタイミングしかない。

というわけで、僕は真っ先に雄二に声をかけることにした。

「雄二、転入生を見に行こうよ」

「……どうしても見に行かなければ駄目か？」

あからさまに嫌そうな表情を浮かべる雄二。

気持ちは分からなくもないけど、今回ばかりは譲れない。

「クラスの人がほぼ全員行っちゃってるし、遠くから見れば、きっと雄二だってバレないよ」

辺りを見回してみれば、既に旅立っているクラスメイト達は何人もいるみたいで、教室の中は僕達を含めて数人しかいない。残っている人達も、

『もちろん見に行くよな？』

『当たり前だろ！これを機にお友達になるんだ！』

『いや！ もうここまで来たら付き合うしかない！』

『きつとMARNNOは俺に会いに来てくれたんだ！』

『バカ野郎！ 俺に決まってるだろ！！』

『でも俺は、やっぱり姫路さんが好きだ！！』

そんな会話をしながら、彼ら三人は出ていった。

……最後のセリフを言った奴、後で裏来いや！

「けどアキ、MARNNOって誰かを知らないんでしょ？」

「……否定はしない。本当に知らないし」

「それじゃあ……顔を見たって分からないんじゃないですか？」

まあ、多分顔を見た所で、それが誰なのかなどまったく分からないだろう。

けど、やっぱり美少女アイドル転入生は、見たい気がする。さっきムツツリーニから写真も買ったしね！

「……明久、顔がニヤけておるぞ」

「ハッ！？ 僕は一体何を……？」

「妄想でしょ？」

美波が凄くストレートに言ってきた。  
うっ……少し、心が折れそうだ。

「ほんじゃ、飯を食いに行く前に、ちよっくら見てくるとするか。アイツに見つかるのも嫌だしな。屋上でいいよな」

「うん、いいよ。その頃には人も少なくなってると思っしね」

「やっぱり今行こう、すぐに行こう」

「いきなり意見を変えてきた!？」

あまりに早すぎる方針変更だ!

……そんな霧島さんに会うのが嫌なのか、雄二は。

折角霧島さんは雄二に好意を抱いているというのに……何て奴だ。僕だったら迷わずその好意を受け取っているというのに。

「けど坂本。ウチ、お腹空いたんだけど」

「あ……私もです」

美波が手を挙げながらそう告げると、姫路さんも若干恥ずかしがる素振りを見せながら、そう言った。

ああ……なんとというか、癒されるなあ。

そんな感じで僕が姫路さんのことをジッと眺めていると、

「……アキのバカ」

「え?何か言った?美波」

「な、なんでもないわよ」

美波が僕のことを睨んでいるのが分かった。

何か呟いていたような気がするけど……気のせい、だよな。

「さて、とりあえず今から見に……」

「……………昼ごはん」

「そ、そうだったな……………」

まさかムツツリーニからそんなセリフが出るとは思っていなかったのか、さすがの雄二も少し動揺しているようだった。

「まあ教室を出ないことには、話は始まらないからな。とりあえず教室を出るか」

「そうですね。今日も皆さんの為にお弁当を……………」

「す、すまないな、姫路。俺はすでに購買でパンを買ってあっただな……………」

「ワシも、今日は家から弁当を持ってきておるのだ」

「……………！！（ブンブン）」

「ああ……………瑞希のお弁当があるなら、私も家から弁当を持ってこなければ良かったなあ」

みんな姫路さんの弁当を拒否することの出来る言い訳を持っている……………となると、僕だけしかないじゃないか。

「あ、あの……………明久君は、どうでしょうか？」

「う、嬉しいなあ……………よかったら、僕が貰うよ」

「本当ですか？嬉しいです」

ああ……………この笑顔を見る為だったら、死んでもいいかもしれない。いつしか僕の体、崩壊するんじゃないかな……………。

「さあて、屋上に行くぞ」

「う、うん」

なんだかいつも以上に爽やかな笑みを浮かべて、雄二はこっちを見

てきた。

コイツ……分かっててこんな顔してやがるな。

そうして僕達は、Fクラスの扉を開けて、教室の外に出た。  
その時だった。

チリン。

「……ん？」

「どうしたの？アキ」

「いや、今鈴の音が聞こえたような気がして」

確かに今、鈴の音が聞こえた気がしたんだけど……気のせいかな。  
しかも、どこかで聞き覚えのある、鈴の音が。

まあ、今はとりあえず昼食の時間だよな……もうすぐ僕の処刑時間  
が迫ってきているも同然なのだけれど。

「……あ」

その時。

誰かの声が、僕の耳に聞こえてきたような気がした。

だけどこの時、僕は気のせいだと思って流してしまっただ。  
これから起きる騒がしい日常の始まりを告げる鐘の音と共に。

〈Slide???)

今のは間違いなく明久君だったよね？

だけど、私が声をかける前に明久君はお友達に囲まれて何処かに行  
っちゃった。

変わってないなあ、明久君は。

小さい頃から、多分ほとんど変わってない。

「……どうしたの？」

その時、私の背後から声が届いてきた。

振り向いてみると、そこにはAクラスの代表  
いた。

霧島翔子さんが

「ちょっと聞きたいことがあるんですけど……」

霧島さんなら知ってるかな？

そう思って私は、こつ尋ねた。

「明久君のクラスって、何処？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8876z/>

---

バカとアイドルと後輩達との日常風景

2011年12月28日08時47分発行